

聖化

日本聖化交友会機関誌

No. 3

'87.5.30

聖化交友会の使命

日本聖化交友会顧問 瀬尾 要造



「天国のことを学んだ学者は、新しいものと古いものとをその倉から出す。」(マタイ二三・52)とあります。

逆説になれない人は、むずかしい問題を、〇×式で答えようとしません。二つの命題が、いずれも真理であるが、それらが一見、相反する場合、それらの一つを排他的にとり入れようとしません。それは廃棄でなく揚棄、すなわち、止揚とか綜合に弱いからでしょう。

ウエスレーは、英国教会の司祭でしたが、メソジズムの運動をとおして、旧と新、伝承と改革、個人的なものとの社会的なものとを綜合した点で、彼はラディカル(急進的)な人であったと言えるでしょう。

教会における改革は、基本的な点では源泉に帰ることによって成されます。そして、新しい洞察と方法を

過去の歴史からの最良の諸要素と結びつけます。

ウエスレーは、オルダスゲイトにおいて、個人的な「心燃える」回心の経験をしました。次の年にはブルistolにおいて、初めて野外説教をしました。それ以後五十二年間に四万回の説教をいたしました。また、彼が力を入れたのは、回心者を聖徒にすることでした。そのため彼は、バンド、クラス、ソサエティのグループを設けて回心者の養成に努めました。

また彼は社会的関心が強く、個人の靈魂の救いや聖化と共に、学校を設け、貧しい人々や病める人々の救済に努め、小さな医学書まで発行しております。

聖化交友会が発足してから日は浅いが、昨年はオスウォルト博士による聖会や、同博士の「聖靈論集」が

発行され、ホーリネスのメッセージが新鮮に宣証されました。わたしたちの聖化交友会のメンバーは多士済々で、思想的・理論的な面ですぐれた人材や、その実践面において有能な方々がおられます。わたしたちは、このさい、ラディカルなウエスレーから学び、このむずかしい時代の教会にレリバンスをもったリバイバルのために、大いに各自の賜物を發揮し合ひましょう。それは、「教会は改革されたがゆえに改革されねばならない」からです。また、「メソジズムは、あまりにも多くのことを完成したので、それ以上完成し得なかつた。」(エドワーズ)と言えますから、「それ以上の完成」はわたしたちの責任また使命であることを自覚しましょう。

第2回 JHA 聖化大会

- 日時 10/29・30日(木)(金)
午前、午後、夜
- 講師 クラレンス・ベンス博士
(マリオン大)
他日本人講師
- 会場 日本キリスト教団
淀橋教会

私見

日本聖化交友会の展望

その協力関係において

● 竿代忠一

A 「日本語で印刷したアルミニアン・ウエスレアン文書の誠に少ないことを遺憾として、これらの文書を経済的に出版し、また重複を避けるために本刊行会を組織して、ここにその会則を設ける」。

B 「本会はジョン・ウエスレーに学びつつ、その神学と実践の今日的意義を明らかにし、聖書的きよめを宣証することを目的とする」。

C 「本会は聖書的な聖化の信仰を確認し、その立場を同じくするものの交わりと協力を通して、ホーリネスの宣証に寄与することを目的とする」。

A は一九五八年に創立された「福音文書刊行会」(EPA)の会則で、現在加盟団体は二〇、今日まで出版した書

籍は三〇点、その中には「荒野の泉」

や「探求シリーズ」も含まれており、ここ数年間、秋にセミナーが開催され、立場を同じくする神学校の交歓会も持たれている。

B は一九八一年に発足したジョン・ウエスレーに学ぶ会(JWSA)の会則で、同会は発足以来、大会を持ち、会誌「宣証」を発行している。

C は一九八五年に創立された「日本聖化交友会」(JHA)の会則で、昨秋第一回聖化大会が持たれたことは周知の通りである。

この三つの団体は、団体加盟(A)、個人加入(B、C)の相違はあるものの、基本的には二つの点で共通の理念を持つていると言えよう。

・一つは聖書的なホーリネスに対する確信であり、
・一つはホーリネスの協力的宣証(ユ

ナイテッド・ウィットネス)の必要性である。

主の奇しい摂理によって誕生し、活動を続けているこれら三つの団体が、それぞれ、与えられた幻と使命に従って前進しつつ、いつの日にか、聖会――

― 宣教 ― 信徒活動等の各部門を持つ日本聖化連盟への発展を期待できないであろうか。いずれがイニシヤティブを取ろうと、いずれがリーダーシップを取ろうと、それは問うところではない、上述の二つの理念が守られる限りは。

これは飽くまでも筆者の私見であって、何等の公式的な立場にあつての考へではない。ただ数回にわたつて米国のクリスチャン・ホーリネス連盟(CHA)の年次大会に出席することを許された者として、一二〇年にわたるきよめ派の協力的証詞の力強さと美しさを見せたいだき、「聖なることがあな

たの家にふさわしいのです」(詩篇九三・五)との旗印のもとに、日本のホーリネス陣営も力強く結集することを(すでに開始されたことを喜びつつ)切に祈る次第である。

祈る次第である。

祈る次第である。

祈る次第である。



JHA

第1回聖化大会に寄せて・峯野龍弘

ついに日本聖化交友会の主権になる第一回聖化大会が実現しました。これは我が国におけるきよめ派の陣営の永く待望してきた出来事であったばかりか、日本の靈界に長い間期待されてきたきよめ派の壮華であつたと信じます。

今日、教団、教派やあらゆる神学的立場や伝統をこえて、全世界的に福音的、聖書的、実践的ホーリネスが渴望されつつあるとき、また日本のキリスト教会のあり方が、有形無形に全世界のキリスト教会から問ひ直され、また期待されている折から、この日本の福音派の中軸に配剤されている我が国のきよめ派の諸団体、諸教会が、聖靈のくすしき御導きのもとに大同団結して「ホーリネス」の宣証のためその祈りと力を集結し得たことは、極めて喜ばしく、また意義深いことであつたと存じます。これは何よりも誰れよりも神のご期待、主の御願望であつたにちがひありません。
願わくは、この神のご期待、全世界のキリスト教会の期待に、みごと応え得る今後の歩みであらせていただきたいものです。

■聖化の恵み 「証人たること」

講師 ジョン・オスウォルト博士/通訳 増田誉雄師

キリスト者のこの世における機能を分析すると、キリストの体であること、神の愛をもたらずエージェントであること、人々をキリストに導くこと、キリストの弟子作りなどであるが、まとめると「証人」となる。

一、証人の意味について
ユダはバビロンとの戦いに敗れ、捕囚の憂き目を見た。一般に国と国との戦いは、当時神々の戦いと考えられていた。そこでバビロン捕囚は、ユダの神がバビロンの神との戦いに敗れたと理解させるべきなのか。決して主なる神が敗れたのではない。主は証人を立てて自らが真の神であることを証明するのである。その証人こそ、どんなに罪が大きくてもヘブルの人々がそれぞれである。

ユダはその罪が大きい故に、神に審かれ、捕囚となつたのである。その神が守ってくれなかつたと言うことによつて、捕囚の行先であるバビロンで、神の聖なる名を汚すことになつたのである。
私たちは証人であつて、その信仰生活によつて神のみ名が崇められるように、神の神たるこ

とを立証することが求められている。その為には、私たちの存在が神のきよい性質をあらわすように、私たちがいかに生活するかにかかつている。



二、神のみ名を汚すもの
①神に最善以下のものを献げること。

例えばCS教師が忙しきの際に、実際の生活の残りかすを神のためにささげていないか。隣り人はその人の生き方を見て、神が尊ばれ、大切にされている程度を知るのである。神のみ名は汚されていないか。

②神の律法を状況によつて勝

手に変更出来ると思わせること。

教会には十年遅れでこの世の風潮が入り込んで来る。キリスト者とは言いながら、結局自分の願いに従つて勝手にやっつていくだけではないか。

③神は解放する力のない方と印象づけてしまうこと。

古い考え、伝統、しきたりから脱皮出来ない状態のことである。

④己れの栄光の為に神のみ名を利用すること。

モーセは、荒野で水を求める民の前に、岩を打つて水を出した。ところがモーセは、自分が水をもたらしことが出来たかの如く、自分の偉大さを示そうとした。

牧師が教会員にきよさを見せようとして、自分の栄光化のためにきよめを求めているか。

あなたを通して神のきよさがうつるかどうか。神がやつて下さつたのに、自分がうまくやつたかの如く言い、神の栄光を盗んではないか。

⑤神は役に立つ者だけに意を用いて下さると思わせること。

現代社会は役に立たない人を捨てている。主は人が人である

故に価値ありとする。私たちは自分に役立つ人を好むが、財なき、役に立たない者を横に退けやすい。これがきよいみ名を汚すのである。

三、あかしを失敗させるもの
神のみ名を汚すように仕向けるものは、内なる罪深き自我の性質である。主のみ名を聖別出来ない汚れのある身では、神に栄光を帰することが出来ない。

聖霊に満たされるまでは、私は一体どんな者であるか。神は私を証人として用いる為にみ旨を告げておられる。

「私に従つて欲しい。私はあなたを造りたい。自分を忘れて私の栄光を求めよ」と。

神は何故あなたを聖別することを求めるのか。あなたが実証することなしには、神の存在もきよめの恵みの存在もあかしされない。真の神の存在が問われている所に、私は証人として召されている。証言台の私は、自分の力や自分の努力で仕えるのではなく、又私自身を誇るためでもなく、神がいかなる方が世を知る為、きよめられねばならない。

(文責 本間)

総務委員会より

■ 昨秋、十一月十三日、十四日の日程で、第一回聖化大会を開催できましたことは、昨年度における最大の成果でありました。また、会員のみならずの厚いご支援の賜物と、心から御礼申し上げます。

講師のJ・N・オスウォルト博士より、主にある交わりと奉仕の機会を与えられたことに、大きな喜びと

感謝をもっておられるとの、礼状をいただいております。今回は企画に時間的な余裕がなかったため、講師も日程の確保に大きな努力を払っていただきました。加えて、ウエスレアン宣教団のロス師が講師連絡のためにご労をとってください、感謝しております。

午後7時のセミナーは、二二三名と二四六名。夜の聖化大会は、三三七名と三三六名の参加でした。

■ 今回、福音文書刊行会(EPA)のご協力により、オスウォルト博士

の著書、「聖霊論集」一一五頁が出版され、感謝します。今後も、福音文書刊行会との協力関係のもとに、出版活動は福音文書刊行会、聖化大会やセミナーは日本聖化交友会の責任で行う、という分担で活動していくことが望ましいとの要望があり、両者の協議を重ねて実施する方向にあります。

■ また、関西においては、J・ウエスレーに学ぶ会のご好意により協賛としてくださり、オスウォルト博士を迎えて、セミナーと大会を開

催されました。聖化の宣証という共通の目的のもとに、今後の協力の在り方を協議し、連絡を保ち、本年度の諸活動を進めていきたいと願っています。

■ 聖化大会のうちに、予約献金をお願い致しましたが、約百万円近いご協力をいただき、感謝しております。なお、日本聖化交友会のこれからの働きのために、お祈りとともに、経済的なご支援を必要としていきます。また、会員の申込みを広く受け付けております。ご協力を！

読む人は育つ人

<EPA図書紹介>

ウエスレー神学の中心問題	ジョージ・A・ターナー著 小出、瀬尾、山崎、大江、萬田訳	A5-472頁 ¥2,500
ウエスレー神学の実際問題	メアリー・A・テニー著 翻訳委員会訳	A5-340頁 ¥3,500
荒野の泉	レター・B・カウマン著 山崎亭治訳	B6-404頁 ¥2,500
戦う使徒ウエスレー	メソジストの一伝道者 瀬尾、小出、土屋訳	B6-270頁 ¥1,000
ウエスレアン=アルミニアン神学の基礎	ワイン・クープ著 大江 信訳	B6-200頁 ¥1,200
キリスト教信仰の探求	W・T・パーカイザー著 小出、萬田、瀬尾、竿代、大江訳	A5-798頁 ¥3,000
旧約聖書の探求	W・T・パーカイザー著 大江、小出、竿代訳	A5-664頁 ¥3,000
新約聖書の探求	ラルフ・アール著 瀬尾、萬田、小原訳	A5-697頁 ¥3,000
伝道の歴史的探求	メンデル・テラー編著 小出、瀬尾、山崎、竿代訳	A5-880頁 ¥6,000
キリスト教教育の探求	サナー・ハーバー編 千代崎、芳賀、竿代(照)訳	A5-785頁 ¥6,000
現代聖化論集	ホーリネス・ブック合本	B6-347頁 ¥1,000
ローマ人への手紙(上・下)	アルダゲート・バイブルシリーズ 中島 守訳	A5-233頁(上)¥450 A5-178頁(下)¥450
勝利ある生活の軌道	アール・G・リー著 小出 忍訳	B6-76頁 ¥500
聖潔の福音	C・B・ウィリアムソン著 宮崎 実彦訳	B6-129頁 ¥600
キリスト者の聖潔	W・T・パーカイザー著 竿代 照夫訳	B6-111頁 ¥500
聖霊の賜物	W・T・パーカイザー著 小出 忍訳	B6-107頁 ¥500
奴隷と自由	ヘンリー・プロケット著 小出 忍訳	B6-214頁 ¥1,000
普段着の聖徒	スタンレー・バンクス著 斎藤、竿代、飯塚訳	B6-148頁 ¥700
ウエスレー神学の源流	グレイト・ハウス著 大江信、竿代忠一、小出忍訳	B6-231頁 ¥1,100
人間形成の神学	ジョン・A・ナイト著 池本、石川、宮崎訳	B6-222頁 ¥1,300
御霊による生活	リチャード・S・テラー著 大江、瀬尾訳	B6-311頁 ¥2,000
ヨハネの黙示録	ラルフ・アール著 小出訳	B6-360頁 ¥2,500
聖霊の実と賜物	コールドウェル著 斎藤訳	B6-236頁 ¥2,300
ウエスレーの黙想と祈り	ウエスレー著 森、島、池本訳	新書版・122頁 ¥1,000
聖霊論集	オスウォルト著 大江、瀬尾訳	新書版・115頁 ¥1,000

■聖化の恵み 「信仰の不足」

講師 ジョン・オスウォルト博士/通訳・増田誉雄師



神は神の子たちに何を望むか。神のみ旨はあなたがたがきよくなることである(1テサ四3)。

一、きよめられるとは何であるか。

①神ご自身の為に、神への御奉仕の為に、聖別されることであり、全面的に神の所有に、神の為の存在になることである。

②神のご性質を頂くことである。神はその動機において純粹であり、愛において完全である。神の働きに召されると同時に、神のご性質にも与かるのである。

③回心時に人は全くきよくされてはいないか。回心は私たちの性質よりも立場にかかわるものであって、きよめは回心後の私たちの為に用意されているも

のである。

二、テサロニケ教会の信仰的不足

①信仰の不足

テサロニケ教会は、み言を受け入れたキリスト者であったが、信仰の不足を補う為に、パウロはテモテを送った(1テサ三10)。信仰の足りない所とは、きよく責められる所のない全き愛の不足である。これはキリスト者になつてはじめて経験される信仰の深みである。きよい生活は自分の力ではなく、きよめて下さる方の力によってするのである。

例えば性的不道德の分野において、思いの中で敗北して居る場合があるが、それを④人の力で閉じ込めようとしたり、⑤この位のことでは誰でもしていると言いつけをしてよしとしたりする。しかし神の力が、人の押し切れない本能的欲望の問題を解決して下さる。神のみ旨は人がきよくなることである。

②兄弟愛の不足

献げ切っていない自我、自己中心が教会の中に分裂をもたらしている。ゆずることの出来ない教理的真理問題よりも、多く

のケースは自我の張り合いで分離が生じている。

③自己訓練の不足

自己を訓練しない、自らの責任を問うことをしない怠惰である。神との交わりが不定期になつてしまっている私を、時間やタレントにおいて神のみ許で訓練する必要がある。きよめ主は、私のうちのだらしなさ、傲慢さ、頑なさに勝利して下さる。

④再臨への待ち望みの不足

信仰生活が形式化しない為に、毎日主との新鮮な靈的關係に意を用いよ。はじめの愛に繰返し立ち戻る必要がある。

三、全ききよめと躍動的生命的信仰

生き生きとしたきよめに立つ信仰の為に、神が生活の中に望んでおられる実践は、何時も喜ぶこと、絶えず祈ること、全ての事につき感謝することである。

①いつも喜ぶこと

幸福感のある時だけ喜べるのではなく、不幸な事態の下でも深い喜びがあり得るのである。自分と主イエスの間に何のわだかまりもない時に、すなわち全ききよめられている時に、どんな事態の中でも喜べるのである。

②絶えず祈ること

キリストと自分との間を裂くものが何もなければ、しつくりとうまく行っている夫婦関係のように、絶えず祈れる。きよめとは主との關係に何の障害物もないことである。

③全てのことについて感謝すること

神のわざに疑いと不満を抱く二心の人は、感謝出来ない。み靈によって神と一つにされて、神の最善を信じる事が出来るようになる。膝を折ることが感謝ではなく、その中に感謝する要素を見出すことが大切なのである。

全ききよめられ、再臨の主の前に、責められる所のない者として下さるのは、神のみ心であり、神のご真実である。きよめられても間違いは犯すかもしれない。しかし心は責められることがない。

きよめて下さい、ご用の為にお用い下さい、ご自身のご性質に与かる者にして下さい、と祈るべきである。神は上よりの賜物である信仰によってきよめて下さる。あなたの生活によってキリストご自身を見せよ。

JHA第一回聖化大会報告

第1回聖化大会セミナー11月13日(木)

ホーリネスの聖書神学 第1講 —旧約におけるホーリネスの概念—

講師 ジョン・オスウォルト博士
通訳 増田蒼雄師

て、ヘブル人たちに對してはつきりとされたことは、あのエジプトから解放したところのその大きな理由、すなわち——ご自身の民を聖き民とすることであつた。そこでは、神様ご自身のご性質にあずかつて、神様ご自身のような者になるということについて、人々は最初、問題が存在していることに、何も気がついていなかった。それはたやすく出来るものと思つていたのである。

ではなくて、神様ご自身が何かを私たちのためにして下さらなければ出来ないことであるというのである。自分たちの力ではどうすることも出来ない、そのような者に對して、自分たちに出来るように、神様から内なる力を頂かなければ不可能なのである。そしてその内なる力は、聖靈ご自身であるということに彼らは気がつき始めたのである。

基本的には聖いということ、神様ご自身のようになるということである。その本質的な意味において、神様ご自身は、ご自身でなければお持ちになれないものをお持ちになつていたのである。神ご自身を私たち人間とは別な、他者なる存在とするものは、神ご自身のお持ちになつているところのご性質である。そして人間の性質とは全く違つたものであるところの神様のご性質であるにもかかわらず、神様は私たちを、そのご自身の性質にあずからせるものとさせようとしておられるのである。そして、あのシナイ山におい

しかしながら、自分たちが、神様ご自身のようにになりたい、そのようなものにあやかりたいという歩みの中にあつて、自分たちの中にそうさせないものがあることに、彼らは気がついたのである。と言うのは、神さまが聖くあると同じように私たちが聖くあるということが、私たちの側の決心にかかつていてではない、いわゆる決心一つでそうなれる種類のものではない。旧約聖書の時代が終りに近づいて、ヘブルの人たちが気づいたことは、もしも自分たちが神さまの聖き、その聖い性質にあずかろうとするならば、私たち

第1回聖化大会セミナー11月14日(金)

ホーリネスの聖書神学 第2講 —聖靈理解の進展と罪の性質の聖め—

講師 ジョン・オスウォルト博士
通訳 増田蒼雄師

旧約聖書を通じて聖靈理解は進展している。出エジプト記で

は職人ベザレルに聖靈が注がれて幕屋建設に異能を発揮した。士師記ではサムソンに聖靈によつて超人的な大力が与えられている。更にイスラエル初代の王サウルに聖靈が注がれることによつて人を指導するリーダーシップにまで展開するのである。

来てはじめて罪の性質に気づき、十字架の血によるきよめを求めに至るのである。

モーセ一人だけで民を指導することが出来ない状態がやつて来ると、聖靈は長老たちに注がれ預言をはじめ、モーセと重荷を分担するに至つた。旧約の終りに至ると、聖靈を全ての人に注ぐという声をヘブルの人々は神から聞くようになって来る。神さまの彼らに對するご目的は、その民が聖くなることである。その為には罪のゆるしと聖める力が必要である。主イエスの公生涯は、聖靈ご自身の来臨のための準備である。十字架の上で主イエスが死なれたのは、ご自分の民が罪ゆるされることと、きよくなることの為である。人間には罪の性質と罪の行為の二方面あることをウエズレーは告げているが、その両方の為にキリストは死なれた。一つのわざが二つの働きをする。十字架を信じて罪ゆるされて、神の前に

罪のゆるしを頂いた時に、全てのキリスト者は聖靈を受けたのである。しかし聖靈の満たしは危機的転機を媒介にして現実化するのである。危機的転換を必要とする罪の性質とは、内にあつて自己を神とせんとする自我性のことである。自我性を明け渡すことが必要だが、誇り高い自我はそう簡単に自己を明け渡そうとしない。私の生涯と生活において、自我が主か、主イエスが主か、ここに明け渡しを決定しなければならぬ危機的瞬間がある。公生涯を主イエスにお献げしますということが何故、回心の時に出来ないのだろうか。回心の時点では、まだその深い意味が悟り切れていないからである。

神の意志か自我意志かという問題におつかる。その時神さまは「全て白紙のままであつた一切を委ねて欲しい」と言われる。公生涯をささげるとは実はこのことの意味なのである。

JHA第一回聖化大会報告